

桜映画社の「結核予防」映画10作品について

—結核予防会の保存と活用事業に協力して—



桜映画社プロデューサー
山田 三枝子

結核予防映画の保存と活用—結核予防会のアーカイヴ事業

結核予防会は今年、創立75周年を迎えられます。設立以来、日本で蔓延していた結核を制圧するために活動され、日本の公衆衛生運動をけん引し、結核予防に大きな貢献をされてきたことはいまでもありませんが、現在も結核とのたたかいは終わってはならず、唯一の結核専門機関として、結核予防会の存在は今後ますます大きくなると確信しております。

私は現在、結核予防会のアーカイヴ事業として、これら業績の一端を2つの映像アーカイヴを通して、多くの人にお伝えするお手伝いをさせていただいております。

一つ目は、桜映画社の結核予防10作品のフィルム原版（35ミリフィルムや16ミリフィルムネガフィルム）からHD（ハイビジョン）デジタルリマスター作業を行い、日本の結核対策の映像遺産として後世に伝えていけるよう保存（アーカイヴ）する事業で、併せて英語字幕版を作成し、アジアやアフリカなどの開発途上国の保健衛生担当者に日本での経験を伝え、結核対策に活用していただくことを目的としています。

フィルムは、約50年で劣化が起り、使用不能になるといわれます。半世紀近く倉庫で大切に保管してきたマスター原版（フィルムネガ）も、このままでは色があせたり、劣化するばかりでした。またネガの状態では、映写が不可で内容を見ることができません。今回、この貴重な映像を長く保存し、活用するという観点から、マスター原版（フィルムネガ）をデジタル機器に取り込んで画質を復元するにあたっては、費用もかかりますが、SDデジタルリマスター（標準画質）ではなく、HDデジタルリマスター（ハイビジョンに対応した高解像度画質）を推薦させていただきました。そして、10作品すべてに英語の字幕をつけ、日本語版と英語版を選択できるようにいたしました。

二つ目は、日本の結核予防の証言映像の制作です。

日本の結核予防に深く関わった島尾忠男先生（現結核予防会顧問）をはじめ関係者の方にオーラルヒストリーの記録として証言映像を作成し、結核が現在もなおお制御できていない感染症の一つで、過去の病気ではなく、一般の人たちに結核に対する正しい知識をもって理解してもらう必要があることや、結核予防会、結核研究所、結核予防婦人会などのこれまでの業績を後世に伝承するため、生の声で映像を記録することが必要と考え、結核予防会様のホームページや行事で公開できるよう制作する所存であります。

桜映画社と結核予防映画

ところで、桜映画社は、地婦連（全国地域婦人団体連絡協議会）会長の山高しげりを代表に都婦連（東京都地域婦人団体連盟）の幹部全員と各地の婦人会会長、田辺繁子、波多野勤子など47名が設立発起人となって、1955（昭和30）年に教育映画の制作会社として発足しました。当時「母親プロダクションの誕生」と新聞でも大きく報道され、児童映画と婦人のための教育映画を企画の柱にして、「母と子の桜映画社」とも言われました。桜映画社の創業者である村山英治は、後年、「環境衛生とか、家庭生活、子供のしつけなどで教育映画の制作会社を作りたい」と、戦前から親交のあった市川房枝さんに相談に行き、山高さんを紹介され、二つ返事で山高さんが桜映画社の初代社長を引き受けてくれたと記しています（新宿書房刊『桜映画の仕事〈映画に生きる〉』より）。桜映画社の第1作は、保健衛生で当時大きな課題だった、「蚊とハエの駆除」の問題を取り上げ、東京瑞穂村の婦人会の協力のもとで、『さよなら蚊とはえさん』（企画：全地婦連）を制作。草創期桜映画社が取り組んだ社会教育映画は、保健衛生から結核予防、売春対策にまで及んでいます。

本稿では、特に1958年より1984年までに制作した「結核予防」10作品を紹介したいと思います。

桜映画社の「結核予防」映画10作品

①お母さんの^{しあわせ}幸福 〈1958（昭和33）年／35mmフィルム／劇形式／48分／モノクロ〉

映画の内容は、主婦であるお母さんが結核になり、医者に入院をすすめられたが、自宅療養を決め、家族が力を合わせてお母さんを看病するというホームドラマ。戦後10数年がたっても、結核が日本で死亡順位の上位を占めているという状況のもとで、家庭の主婦とその家族に結核予防（家庭内感染）を啓発する目的で制作されました。当時のチラシを見ると、文部省選定、東京都教育委員会選定、都民映画コンクール教育映画銀賞のあとに、結核予防会をはじめ、日本PTA全国協議会、中央児童福祉審議会、全国地域婦人団体連絡協議会、主婦連合会、日本青年団協議会など11の団体から推薦を受け、さらに試写会に、秩父宮妃殿下がご臨席になり、この映画を推奨された…ということが書かれています。「家庭の主婦が結核問題に関心を向けるよう結核予防関係婦人団体の育成、強化に格別のご配慮を示され」（結核予防会刊『60年の軌跡』より）秩父宮妃殿下が結核予防に深い関心を寄せられたことをここでも知ることができます。

②小さな仲間 〈1958（昭和33）年／35mmフィルム／劇形式／50分／モノクロ〉

「健ちゃん、やっちゃん、三ちゃんの5歳と6歳の子供たちは河原で捨てられた子犬を見つけ、駄菓子屋である健ちゃんの家で飼うことに。3人は子犬の様子を見に通うが、健ちゃんのおじいさんが肺の病気がしんどい噂が立ち、やっちゃん、三ちゃんの母親は健ちゃんの家に行って遊んではいけないといいます。おじいさんは結核で、やがて健ちゃんにも感染していることがわかり、お母さんは健ちゃんをしばらく空気の良い郷里へ行かせるつもりです。二人は、健ちゃんが田舎へやられなくてもいいように、ビルの屋上にのぼって、

いい空気を吸わせて…」

当時、結核患者は、全国に48万人と推定され、子供の結核は、その殆どが大人から感染していたことから、子供を結核から守ることを訴える児童劇映画として制作されました。

③たくましき母親たち 〈1959（昭和34）年／35mmフィルム／劇形式／48分／モノクロ〉文部省選定、厚生省推薦、東京都教育委員会選定、国民文化会議推薦、第4回教育映画コンクール銀賞

当時、保健文化賞を受けた大阪府吹田母子会をモデルにした群集劇で、実際に母子会の会員が炎天下、撮影に協力、出演した会員は1,000人を超えました。日本の公衆衛生運動が、「蚊とハエの駆除」の活動からやがて地域の様々な健康にかかわる問題に総合的に取り組む活動に進展している様子が、この映画から伝わってきます。特に映画の終盤、結核住民検診をきっかけに、〈母子会〉組織が全市に拡がり、検診受診率が保健所の予想をはるかに超えて89パーセントに達し、大勢の人たちが集まってくるころは圧巻です。戦後、日本の公衆衛生運動は、村ぐるみ、町ぐるみの地域の住民参加による活躍が大きいことや今日のがん検診の礎を築いたのが結核集団検診であったことが、この映画を観るとよくわかります。結核集団検診は、ツベルクリン反応検査やBCG、レントゲン間接撮影等で結核を早期に発見し、病気の進行や蔓延を予防してきました。日本の予防医学で結核集団検診の経験が大きな役割を果たしてきていることを改めてよく理解できました。

④再起への道 〈1959（昭和34）年／16mmフィルム／記録形式／21分／モノクロ〉文部省選定、厚生省監修 企画：財団法人結核予防会

この映画は、ある結核患者の手術後の抜糸から集団体操にいたる肺機能訓練療法の個人指導を記録して、社会復帰するまでを紹介。当時、結核予防会保生園（東



①お母さんの^{しあわせ}幸福



②小さな仲間



③たくましき母親たち

村山市にある結核予防会の結核療養施設)で指導を受け、実際の患者さんに出演していただいています。

今回この作品の映像アーカイヴを行うにあたって、島尾忠男先生(現結核予防会顧問)が作品解説文を寄せてくださり、その一部をここでご紹介します。「病気になることによって生じる身体への影響をできるだけ少なくとどめ、社会復帰を容易にする理学療法は、今日では医療の中で欠くことのできない地位を占めているが、肺結核など呼吸器領域での理学療法が日本で導入されたのは1957(昭和32)年のことである」先生は、1955年4月から1年間スウェーデンに留学、留学先で肺結核の手術前後に行われる理学療法に出会い、スウェーデン結核予防会より56年に刊行された本を帰路の船旅で翻訳し、『肺機能訓練療法』と題する訳本として結核予防会から出版、日本で初めて「理学療法」を紹介されました。この映画は、先生が日本へ持ち帰られた肺機能訓練療法を実際に結核療養所で胸部手術前後に応用したドキュメンタリーとして、大きな意味のある作品です。私は、今日のリハビリの生みの親が結核予防会の島尾先生だったことを知り、また映画の冒頭にスウェーデン結核予防会に対して、謝辞が字幕で紹介されている意味を初めて理解することができました。

⑤**生きぬく** 〈1961(昭和36)年/35mmフィルム/劇形式/30分/モノクロ〉文部省選定、東京都教育委員会推薦 企画：財団法人結核予防会

この映画は、世間で正しく結核が理解されていないために、回復者が就職問題でどれ程苦しんでいるか、社会復帰には、周囲の温かい愛情や支援、特に雇用する側と一般社会の理解が必要と訴えています。女優の三条美紀さんが結核回復者である夫を支える妻役で好演しているのが印象的です。この作品の台本を探しに倉庫に行き、古い作品ファイルの中から、映画の脚本を担当した田辺耕二宛てに寄せられた患者さんからの手紙を偶然発見しました。鉛筆で書かれた手紙には、病気を克服して、回復してからも、現実問題として就業の壁が大きく立ちだかっていること、是非とも映画には、社会に出て働きたいかを盛り込んでほしい、

という内容が書かれていました。映画は、このような患者さんの思いを真摯に受け止め、代弁しています。この時から私は、結核に関心のない人にも当時の患者さんの切実な思いを何か伝えていきたいと思うようになりました。

⑥**小さな灯をまもる人びと** 〈1963(昭和38)年/35mmフィルム/劇形式/30分/モノクロ〉文部省選定 企画：財団法人結核予防会

「郷里に戻り、再婚した主人公のなお子は、前夫を結核で亡くしたことを家族に話していない。村には結核予防婦人会があり、住民健診活動をしていたが、呼びかけの度に不安に駆られ、検診に行かなかった。やがて子供を出産し、『あなたの胸の写真が大切な赤ん坊の生命を守るのよ』と、個別訪問にきた婦人会のつね子に諭され、受診の決心をする。結果は結核ではなく、それ以来、積極的に結核予防活動を始めるが…」

当時、30代の結核による死亡率が高く、若い母親と子供の生命を守るために結核検診の大切さを訴えた作品です。結核予防会刊『60年の軌跡』には、「昭和25年に長野市で始まった結核予防婦人団体の結成は、32年には結核予防婦人会長野連合会となり、33年には静岡県にも結成され、熊本県、秋田県と続き、昭和50年に全国結核予防婦人団体連絡協議会が結成され、52年に厚生省から認可され社団法人となって発展…」と記されていて、この映画も長野県結核予防婦人会の協力で、長野県小布施町で撮影を行っています。りんごの花咲く農園風景は、カラーであったらどんなに美しい映像だったんだろうかと思います。監督は、『兄いもうと』など戦前から活躍された木村莊十二(洋画家、木村莊八の弟)です。

⑦**サツパと老人** 〈1966(昭和41)年/35mmフィルム/劇形式/36分/モノクロ〉企画：財団法人結核予防会
1950(昭和25)年、日本人の死亡順位が第1位だった結核も、この映画が制作された1966年には、第7位となり、結核で死亡する人は少なくなっていました。しかし、患者数はあいかわらず88万6千人で減少せず、特に会社などの組織に入っていない老人の中には、健康診断を一度も受診しない者も多かったという状況の



④再起への道



⑤生きぬく



⑥小さな灯をまもる人びと

中で制作されました。内容は、三陸地方の漁村を舞台に結核に感染した老漁師とその孫娘を通して、老人と子供の結核予防を訴える社会教育映画で、東京オリンピックが1964年、60年代は日本経済が高度成長期に入ったといわれていますが、一方地方の過疎化が拡大しはじめ、取り残された貧しい漁村の生活が描かれています。貧困と病気を考えさせる一作でした。

⑧**家族のころ**（1969（昭和43）年／16mmフィルム／劇形式／32分／モノクロ）文部省選定、東京都教育映画コンクール金賞 企画：財団法人結核予防会

この映画は、福島県の八代きみ子さんの入選作文を忠実に脚色演出した作品で、結核予防と家族のころの通い合いをテーマにして、結核予防婦人会の会員を中心とした複十字シール募金運動の収益金により制作されました。「高橋ブリキ店の主人惣平は、近頃よく咳き込み、『一度、医者に診て貰ったら』という家族の勧めにも耳を貸しません。惣平は家族の生活を思って、結果を恐れ、受診を拒んでいましたが、結果は、肺結核と診断、惣平の入院を機に家族が心一つにして助け合い…」

1969年は、第4回結核実態調査が実施され、結核患者数が153万人と発表され、結核の死亡順位は8位となりました。

⑨**結核とのたたかいは続いている**（1973（昭和48）年／16mmフィルム／記録／30分／カラー）文部省選定 監修・指導：結核予防会結核研究所

企画：財団法人結核予防会

「ストレプトマイシンの発見以来、治療も手術療法から化学療法（薬剤治療）に変わっても、結核が多くの人を命を蝕み、治療には長期を要する病気であること。大切なことは体の抵抗力を強め、結核の感染を未然に

防ぐことで、抵抗力の研究としてリンパ球をはじめ様々な実験を結核研究所で続けていることを、連続マイクロ撮影を駆使して紹介した記録映画」結核菌が1ミリの200分の1以下の微生物で、しぶとい生命力を持つことや病巣が広がる様子などがマイクロの映像で明らかとなります。この作品は、清瀬にある結核研究所の一室に監督とカメラマンが泊まり込んで、徹夜の連続マイクロ撮影を半年も続けて誕生しました。映画は、日、英、インドネシア、タイ、ビルマ、アラビア、ネパール語版が作成され、世界中で結核予防の啓蒙のため利用されました。

⑩**よみがえる母のうた—インドネシアの結核予防—**（英語タイトルThe Struggle of A Mother）（1984（昭和59）年／16mmフィルム／記録形式／34分／カラー）厚生省推薦、文部省選定

企画：財団法人結核予防会

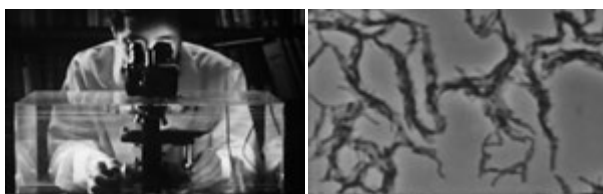
途上国では、いまだに結核への偏見が根強く、正しい治療や予防を進めることが難しいという状況の中、インドネシアの農村で結核に侵された一人の母親が周りの人々に励まされながら病気を克服していく姿を通して、結核への認識と予防を訴えました。当時、世界の結核患者は、1千万人を超え、そのうち350万人が死亡、その大半は、映画の舞台となったインドネシアなどの途上国が占めていました。日本では、結核対策が熱心に進められた結果、高度蔓延国から中等度蔓延国に移行しつつあった頃で、映画は、日本の結核予防会が、国際協力活動の一環として、インドネシアの人たちのための結核予防映画を、インドネシア語版と英語版で制作しました。さらに日本の国民にも、結核への認識と撲滅を訴え、複十字シール募金協力を呼びかけるため、日本語版も作られました。



⑦ サップと老人



⑧ 家族のころ



⑨ 結核とのたたかいは続いている



⑩ よみがえる母のうた—インドネシアの結核予防—